

メディア・リテラシーの観点による情報教育の必要性とその教育内容

1. □ はじめに

- □ 本論文では、インターネットの利用を中心に情報がいつそう進むであろう我が国においてはメディア・リテラシーの観点による情報教育が必要であること、およびその教育内容として記号学に基づく情報の批判的な読解が特に重要であることを主張するとともに、筆者らが行ってきた教育実践の概要と其中で得られた知見を示す。
- □ 本論文は、実験科学的な手法によって特定の教育内容・手法の有効性を示すものではなく、筆者らの情報教育に対する課題意識とそれに基づいて行ってきた教育実践の概要とその意義を、筆者らの主張や解釈を交えながら示すものである。
 - □ 教師自身による教育実践の論文化は記述のスタイルも確定しておらず難しい
 - □ 本研究の最も重要な部分が実験科学的な手法では示せないため、このような手法で論文を作成した
- □ 本論文によって、情報の内容（コンテンツ）を主題として捉えるこれからの情報教育の一つのあり方が示される
 - □ 特に大学においては、情報リテラシー教育に対する需要が低下する可能性がある
 - □ コンテンツ中心型の情報教育が模索されている
 - □ 本研究はコンテンツ中心に推移する大学での情報教育のあり方についての提案としての意味も持つ

2. □ メディア・リテラシーの観点による情報教育の必要性

- □ メディア・リテラシーの観点が必要とされる背景としては、インターネットの利用を中心とするITの普及によるコミュニケーションの前提の変化が挙げられる
- □ インターネットの普及により、情報の価値や信頼性を自己責任によって見分ける必要性が高まる
 - □ これまではマスメディアによる権威付け（その逆に、口コミによる噂レベルの情報）によってある程度情報の内容が保証されてきた
 - □ 事実がどうであれ、情報受容にあたっては、そのような区別を頼りにしてきた
 - □ インターネットでは、情報の送り手は多様であり、そのような区別を当てにできない
- □ 社会全体に目を向けてみれば、コンテキストの共有が当てにできない状況へと向かいつつある
 - □ 「近代社会の成熟化」に伴う現象として、生活文脈の断片化、文化のサブ・カルチャー化、情報の価値の相対化が起こっている
 - □ インターネット利用は、これらの現象をますます進行させる
 - □ コンテキストを共有しない相手からの情報をいかに判断するかが重要になる
- □ このような状況では、「情報の内容を自分の力で批判的に吟味する力」が特に必要となる
 - □ コンテキストの違う相手を排除することは現実的でない
 - □ 無理やりコミュニティを作り、コンテキストの共有を進めるのも現実的でない
 - □ 情報に対して各自が適度な距離を探るしかない
- □ そのような教育に対する準備は、情報教育が積極的に担っていくべき
 - □ 従来の教育では、このような状況を想定した教育はしっかりと行われてきていない
 - □ 日本の教育はどちらかといえば共同体志向
 - □ 情報に対して主体的に格付けを行う力は「ITを活用する力」に含まれる
 - □ 特に大学においては、情報リテラシーを身に付けた段階であり、その後に学ぶべきことである

3. □ 情報教育としてのメディア・リテラシーの概要

- □ 情報教育のなかにメディア・リテラシーを位置づけるためには、何を最も優先すべきなのか問われる
 - □ 他にも学ぶべきこと（特にITの基本原則の理解が必要）はあり、時間が限られている
 - □ 大学生を想定しながら、最低限学ぶべきことを示す
- □ 優先すべき教育内容：基礎となるのはメディアテキストの読解である
 - □ 「読む力」をつけることがすべての基本である
 - □ 「読むための視点」を鍛えることは、「表すこと」の原理を学ぶことにつながる
- □ 教育目標の設定：社会的コンテキストの意識化と、自己の価値観の相対化が目標とされる
 - □ クリティカルであるための第一段階として、「社会的コンテキストに枠付けられた自己の発見」を位置づける
 - □ 「無条件に依拠してきた前提」の存在に気づき、それを相対化する力が求められる
 - □ テキストの読みの可能性に気付くことで、自分にとっての情報の価値の在りかや信頼に足るものかどうかの判断基準を自ら作り出し、より高い精度で見分けることができる
- □ 実践のモデル：発見のためのツールとして、記号学の基礎概念を用いる
 - □ 読解の授業を構築する際には、前提とするモデル（読みを行うためのフレームを与えるもの）が必要である
 - □ 読解を方向付け、発見を促すための道具立てが必要
 - □ 記号学が選ばれる理由は文化や価値観を主題化し、その相対性を発見させるから
 - □ 最低限理解すべき概念は、記号、分節、差異、コード、コンテキスト、

4. □ 授業実践の事例

- □ 「情報教育論」における授業実践の事例を示す
- □ カリキュラムの全体像は次の通り
 - □ 雑誌広告の読解を中心に展開する
- □ 第1回目：「記号」という見方の獲得（メディアテキストは記号である、という見方）
- □ 第2回目：メディアテキストの生産と価値観の関係についての理解（価値中立的な表現は存在しない、という視点の獲得）
- □ 第3回目：メディアテキストの解釈と社会的コンテキストとの関わり方の理解（あらゆるメディアテキストは読み手の置かれるコンテキストの中で読まれる）
- □ 第4回目：自己/他者の価値観、その背後にあるコンテキストの相対化と、コミュニケーションの可能性について

- 第4回目：自己/他者の価値観，その背後にあるコンテキストの相対化と，コミュニケーションの可能性について

5. □ 授業実践から得られた知見

- これまでの授業実践の中から得られた知見を示す
- 情報技術についての教育と連携させることによって，それぞれの意義が深まる
 - 特に情報技術に関心の高い学生は，このような実践に戸惑うことがある
 - 新たな視点を持たせるきっかけとなる
 - 情報技術を学ぶことは，情報の内容に対する判断の裏付けを与える
- 指導者は「自分が生きるコンテキスト」「学習者が生きるコンテキスト」を意識すべき
 - 教育実践の目的は，客観化された知識を与えるのではなく，学習者にいま・ここで自分が生きているコンテキストを自覚させることだから
 - 情報の内容を主題化するならば，現在の文化や社会のコンテキストを正面から相手にすべき
 - 指導者自身が情報文化に対して開かれてなければならない（消極的，排除ありきの態度であってはいけない・特に大学では）
- クリティカルな視点は「学習者自身の価値観」に向けられるべき
 - メディアが虚構であるということはある程度把握している
 - むしろ，読み取る内容には読み手の価値観が強く反映されるという点に気付いていない
 - コンテキストの違いは具体的な読解を通して意識することができる

6. □ まとめ

- 情報教育は，社会の変化に対する対応であると同時に，新たな社会を作る営みであることを自覚しなければならない
- 筆者らは，情報教育が単に学習者を「情報化社会」神話の強化・再生産のプロセスに動員するだけのものであってはならないと考える
- 学習者それぞれが，IT活用の現実を見据えつつ，自己の見識をもちながら新たな社会のあり方を築いていけるための準備を行うことこそが，情報教育の使命である
- メディア・リテラシーの観点が必要であるという主張は，情報教育が今後このような使命を果たしていくために必要なものは何か，という問いに対する筆者らの答えである